

東北学院大学入学式 告辞

本日ここに、2013 年度入学式を挙げるにあたり、新しく入学された皆さんに心からお祝いを申し上げます。またご臨席の保護者・ご家族の皆様にお慶び申し上げますと共にご来賓の皆様にも深くお礼申し上げます。

東北学院大学は6つの学部と7つの大学院研究科を有する、東北でも最大規模の私立大学であります。歴史も日本の私立学校の中でも有数の長さと言ふ内容の深さを誇っています。近代明治日本誕生の時代、西欧とアメリカの文明流入の一環としてプロテスタントのキリスト教伝道者が到来し、横浜・東京・関西各地に教会だけでなく、いくつもの学校を建設し、日本の教育近代化に貢献したのですが、仙台では、1886 年（明治 19 年）にアメリカ人宣教師 W. E. ホーイ、D. B. シュネーダー、そして日本人初代のクリスチャンの一人押川方義らの働きによってキリスト教学校が設立されました。これが東北学院の前身、仙台神学校であります。創立 5 年目に仙台神学校は東北学院と改称し、現在の名称となりました。

創立以後、東北学院は教育の幅を広げ、キリスト教を基盤とした高等教育機関としての歴史を歩んできました。学生をかけがえのない個人として尊重して、その人格を成長させ、個人の持つ能力を最大限に伸ばすこと、そのためにキリスト教を基盤とした教養教育を施す。その過程を経て、各専門分野の知識と技術を身に付け、社会へと送り出す。この営みは今も変わっていません。

127 年の歴史を迎える東北学院は、このような教育理念のもと、総計 17 万を越す卒業生を世に送り出してきました。仙台で、東北で、否日本全国のみならず世界各地で、職場で、また家庭で、よい働きをしています。プロ野球選手がおり、政治家がおり、タレントも、学校の教員もいます。社会では、これら東北学院卒業生たちに、「学院卒業生は信頼できる」という評価を与えてくださっています。大変うれしく思います。

そのような評価を得る人材・人格が育つ要因が、私は東北学院大学の基盤・建学の精神であるキリスト教の教えと、人格陶冶のための教養教育重視の伝統、そしてその上加わる専門的分野の知識と能力、この 3 層構造の教育にある、と信じています。新入生の皆さんにも、大学はその教育メニューを提供します。これからの 4 年間で皆さんは自覚的・自主的に大事な時間と受け止め、学び、成長してゆく時間とし、社会から喜んで迎えられる評価を身に付けて卒業してってください。今日同様に大学院入学なさる皆さんは、学部 4 年の学びの後、さらなる専門研究を志しておられるわけですが、目指す方向は同じであります。

まず学院の教育理念の基盤、これを建学の精神とも言います。それは、定まった言葉としては、かつて理事会が行った宣言の中にこうあります。「宗教改革の福音主義キリスト教信仰に基づく個人の尊厳の重視と人格の完成の教育。それは聖書の示す神に対する畏敬の念とイエス・キリストにならう隣人の愛の精神を培い、文化の発展と福祉に貢献する人材の育成を目指す」、と。

この精神によって、大学の 3 つのキャンパスでは、毎朝 10 時台に、短くはありますが礼拝が必ず行われます。また必修授業としてキリスト教を学ぶのです。聖書を読み、それに基づくメッセージを聞き、学院の根幹の精神を知ってほしいと思います。大切なのは、

自分という人間は、自分だけの力で生き、決断してゆくのではない、あなた方を見つめ、この大学へと招いて、見守っておられる神が生かしてくださるのだ、ということを知り、信じる、ということです。これらのことは、明日から始まるキャンパスライフの中で、少しずつ理解されることだと思っています。

これから皆さんは聖書の具体的な言葉を学ぶことになると思います。印象的で、心の奥に触れる言葉とであってほしいものです。今日は皆さんの学びのために、「蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」（マタイ 10:16）という言葉をご贈りしましょう。本来は社会で生きてゆくための姿勢についての助言なのですが、大学での学びには賢さと、事実をありのままに受け止め、自らの無知を隠さず、謙虚に学ぶ素直さが必要だ、という意味でもあります。

そこで、次に教養教育ということです。6つの学部にはそれぞれの専門性がありますが、いかなる分野の知識を身に着けるとしても、何より人間を知り、社会での生き方を知るためには専門分野の基盤となり、背景となる、幅広い事柄をわきまえておく必要があります、それを大学前半期を中心に学ぶのです。それは外国語であり、他者とのコミュニケーション能力であり、政治・法律・経済・科学・芸術などの諸分野の基礎的知識であります。

理科系であれ、人文社会系であれ、皆さんは高度な専門分野を学んで卒業されるのですが、大学の外の社会では、それだけでは決して十分ではないのです。大学で得たつもり的高度なノウハウをそのまま用いようとしても通用しないことが多くあるのです。これは、自分が学んで卒業した学部や学科の専門と、直接関係のない企業などに就職するような場合にはいっそう言えることです。

たとえば、大震災後の復興をめぐるさまざまな問題があります。津波に襲われた地域からは、高台に町ごと移転することを計画しますが、住民の意見の一致が得られない。専門的認識からよいと思われても、人間感情や利害関係から納得されない、このようなときに、粘り強く説得にあたったり、まったく分野の違う発想を提案したり、ユーモアを駆使したり、という、要するに人格の幅の広さが求められるのです。東北学院大学での幅広い学びは、複雑化し、不安要素の多い21世紀の世界では必ず役に立つでしょう。

大学では、これらいくつかの要素からなる教育を、皆さんが過ごす4年間の在学中、どのように受けてゆくかをカリキュラムで示します。多分その内容は膨大で、途方に暮れるでしょう。オリエンテーションなどを利用してよく把握し、学ぶべき科目を選択してゆく必要があると思います。大事なのは、皆さん自身が、大学生活をどのように展開してゆくか、その意志を明確にもつことです。今、卒業論文のテーマを絞る、ということではなく、また一年生の間は何でもかんでも、というのではなく、やや先の、しかし自分が希望する、ある程度ゆるやかな将来計画を見据えた上で、今その計画の第一歩として役立つこと、その次にすべきこと、を描き出す、ということです。大学の教員たちは、その計画を立てること、そして皆さんに教えること、を支援し、実行します。このように皆さんの大学生活の最終目標に到達できるよう大学は用意しています。しかし欠かせないのは、皆さんの希望を明確にし、それを教授たちに示し、教えを請う、皆さん自身の言葉です、説明力です。

「蛇の賢さ」が必要です。もう一つ聖書の言葉を加えるなら、「求めなさい。そうすれば与えられる。・・・門をたたきなさい。そうすれば開かれる」（マタイ 7:7）であります。

21世紀に入って、もう13年経ちました。過ぎ去った20世紀は、多くの課題、正確

に言うとは深刻な難題を次の世紀に託したといつてよいと思います。地球温暖化・環境破壊・種の絶滅などの問題、大国先進国と発展途上国、あるいはキリスト教国とイスラーム国家の対立・テロ、国際的な通貨危機、貧困と飢餓、経済的格差・ワーキングプア、差別、家族の崩壊、いじめ、ITの加速度的進歩とそれに伴う犯罪、新型ウイルスへの恐怖、等々の問題が、21世紀の10年余の間に、すべて20世紀よりも深刻化している、という現実があります。日本の少子化や、人間関係の希薄化、などは予想を遙かに超える勢いで進んでいると言うべきでしょう。そしていわゆる「想定外」の東日本大震災の激甚な被害が2011年3月に起こったのです。

人類社会は、また日本は、滅びつつあるのか、そのように問いたいほどのことかも知れません。しかしもちろん、一方で私たちは希望のきざしを見つけられないわけではありません。山中博士のi-Ps細胞開発はその一つかも知れません。

東日本大震災被災地復興、という面で言うならば、この東北学院の震災後の取り組みは、日本全体の復興へのそれと一致し、ある意味では先取りするものでした。学院自体大きな被害を受けましたが、特に在学生たちの被災者支援の思いが強くありました。自発的にボランティア活動に立ち上がり、大学は他機関や大学に先駆けてボランティアセンターを立ち上げ、社会全体のボランティア精神高揚に働きかけました。人間が困っている人間を助ける、大震災はこの当たり前でありながら、おろそかにされてきたことを日本人に再発見させたと言えるかも知れません。また、学院大の教授たちは、その専門分野の能力を生かし、大震災の原因探査や復興策への提言などの形で貢献すべく「震災学」というプロジェクトを立ち上げました。

社会の危機的状況に、人間として関わり、その解決に力と時間を捧げる、という姿勢は、先に悲観的に並べた諸問題への対策として、基本的な一歩、を提示します。そして、そもそも大学というものが、その地域にあって、地域の大学として共に生きる、その地域に大学人が学生、教員の別なく貢献することは、その一歩に主体的に関わる、ということでもあります。東北学院大学はこれからも東北の地の大学として、地域に関わり、貢献する大学です。皆さんにもその覚悟を共にしていただきたいと思います。

再び東北学院の建学の精神が想起されます。大学がなすべきこのような貢献もまた、「汝の隣人を愛せ」、また「人にしてほしいと思うことを人にもしなさい」とのイエスの言葉に根拠をもつのであります。改めて、キリスト教の教えは時代を超え、世紀をも超え、不変の価値をもち、21世紀の不安な諸側面打開のよりどころである、と信じるものです。

厳しい時代の中で大学生活を始めようとする皆さん、希望はあります。その希望を更に確実にするために皆さんは大学の4年間で、計画的に、着実に、しかし心は高く、快活に、過ごしてほしいと思います。そのキャンパスライフを大学はいつも見守り、支援を惜しまないことをお約束します。

以上をもって学長の告辞といたします。

2013年4月3日

東北学院大学学長 松本 宣郎